

## 明治初期の日米文化交渉

著者	藤井 甚太郎
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	6
ページ	48-63
発行年	1953-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/9837">http://hdl.handle.net/10114/9837</a>

# 明治初期の日米文化交渉

藤井甚太郎

講演の本筋に入るに先立ちまして一言、御挨拶を申し上げます。今日は私古稀祝賀記念の文字を冠して、法政史学会主催のこの会をお開催下さいましたことを、誠に光榮に存じ厚く主催者に御礼を申し上げます。又講師として本学総長大内兵衛先生、木村毅先生、隈元謙次郎先生方が、御多忙にも係はらず曲げて御暇繰下さいまして、御講演下さることを、先生方に対して厚く御礼申し上げます。又多数の聴衆各位が早々に御出下さったこと此れ亦厚く御礼申し上げます。誠に感激の至りであります。

一、序説 さて私の演題は、「明治初期の日米文化交渉」と致して置きました。併し諸君に於かせられましては、文字を読まるに差支ない方ばかりでありますから、既に書物に書いてあることを、此処で更めて申上げる必要はありません。で私が先輩方々から聞いた話と、書物に書いてあることを、綴り合わせて「日米文化交渉開書」とでも申す一講演を致し、明治初期時代の日米関係の本質を述べたいと存じます。ニュー・イングランド辺を根拠地と致しています漁船は、主として太平洋に鯨を逐つていたのでありますが、十八、九世紀になると、捕鯨が盛んに太平洋上に行はれて参りました。それから又米国の対支貿易が一七八四年(天明四年)に広東にて初めて開かれまして以来、年と共に盛んとなり、太平洋を航行する米船が多くなつて参りました。別けて加州に金鉱が発見せられて東部の人々が一握千金を夢みて西部へと赴く、かの映画西部劇でお馴染のあれであります。処が加州は亞細亞大陸の謂はゞ対岸という訳でありますし、米国の対支貿易船が、中国沿岸に沿ふて北上するにつれて、太平洋上の船路が北上する。すると太平洋上に於ける日本列島存在の意味が、益々重くなつて参ります。これは海上の話。(フオスター著「米国の対東外交」(日本文明協会訳)参照)



此の頃陸の方を見ますと、スラブ民族が西比利亞の毛皮獸を東へ東へと追つて、沿海洲からカムチャツカの方まで参り、更に千島を島伝へに南下して参りました。そしてその眼の前に日本の蝦夷地を見出した。斯くして日本の島々が、世界の上に価値附けられて参りました。これが陸からの問題。(ロストフスキー著「ロシア東方略史」(東亜近代史研究会訳参照))

左様な趨勢の上からして、米国の輿論として日本の開国を呼ぶ声が高くなつて参りました。斯くしてペリー來航の趨勢を馴致したのであります。(高橋作衛著「日米の新關係」参照。)乍併米国の極東政策にもモンローの大宣言が多分に拘束力を持つていまして、當時は亞細亞諸国に対しては極めて友好的であつたと断言出来るのであります。一例を申しますと、一八四二年(天保十三年)に英清兩國間に結ばれた南京條約の條文と、一八四四年(弘化元年)に米清間に結ばれた望厦條約の條文とを比較しますと、米国は英國に較べ余程清国に対して和らか味が出ているのであります。抑々この條約の結ばれます原因は阿片戦争でありますが、当の問題の阿片に就いて南京條約の方では何等の規定が無いに係はらず、望厦條約の方では阿片を貿易する米人は所罰する旨米国側より規定しているのであります。(維新史料編纂會編「維新史」参照)この南京條約等は清國人をして興國運動に奔走するに至らしめた原因をなしているのであります。(東亞經濟調査局編支那の興國運動参照)米国は余程手回らかに中國に対処しているのであります。實際清國領土内で米兵が軍事行動に出でた初めは、一九〇〇年(明治三十三年)の北清事變の際連合軍と一緒にやつたのが初めであると思ふのであります。(矢野仁一著支那近代外交史参照)セオドル・ルーズヴェルト大統領の如きもそのハーヴァート時代の同窓生でありまして日露戦争當時駐米の金子堅太郎男に対して、オイスター・ベアの別荘で、盛んに亞細亞モンロー主義を説きまして、新嘉坡以東は日本に任せると主張しているのであります。(金子堅太郎述亞細亞モンロー主義)尤も日露戦争の際に、ルーズヴェルトが講和の斡旋に乗り出しましたことに就いては、歐羅巴方面では米国の亞細亞に対する野心を疑つていた人々もありまして、英國のエデンバラ評論の如きは、日露講和の斡旋は亞細亞の歴史に於いてのみならず米国の歴史にも重大なる意義を有すると迄論じていたのであります。(エデンバラ・レビユー)その當時は今日に於ける米国の亞細亞に対する関心とは大分角度が違つているように思ふのであります。斯くの如く



米国の東洋に対する関心は年代によつて違ふのでありますが、然らば今茲に私が述べんとする明治初年に於いては、米国の日本に対する大体の角度は那辺にあつたかと申しますと、俗語で申しますと、マア日本を赤チャン位に思つていた。いや是れは無理もないのでありましてマアカアサー元帥すら、今日の日本人を十二才位に評価していた始末でありますから、まして九十年も前の日本人は赤坊と評しても致し方はありますまい。ですから明治初年の遣米留學生などを、下宿させても、目白か、頼白を飼つている位に思つて愛撫して呉れたと思われれます。九十年後にその目白か頼白が、真珠灣を攻撃しようなどは、夢にも思つていなかったと思ふのであります。一八七五年(明治八年)前後ボストン・テックに留学していられた後の三井合名会社の理事長岡琢磨男なども、後年その時に世話になつた人などに、日本に錫光に來なさいと云つても、日本にはライオンでもいる処位に思つて來なかつたと云つていられたのであります。(男爵岡琢磨伝参照) 推して明治初年の対日理解の程が察せられるのであります。そして仲々に日本を知ろうとする米国人はいなかつたのであります。十五六年前コロンビア大学のピーク氏が日本に來た。此の人は大清会典の研究者でありますが、日本に立寄つた時私が日本に於ける大清真典の研究について各方面に案内いたしました、その時の話に、中国の研究なれば一生の仕事に値するが、日本研究では左様に參らないと言はれましたが、尤と思ひます。今日こそ大麥に日本研究が米國で進んでいます、大戦前までは左様ではなかつた。尤も戦前華盛頓の米國議會圖書館で日本の書籍を購入する時の資金の管理者を私致していたが、随分多額の書物を購入しました。併し金額の点は日本と米國との間には比例上、大分開きがあります。

二、米國文化接受の道筋 米國文化が日本に接受される道筋に就ましては、(一)は漂流民の將來するもの。(二)は外国使節等の將來するもの。(三)日本よりの遣米使節の將來するもの。(四)日本留學生の將來するもの。(五)米國地理歴史文物の記事を圖書によりて日本に伝へたもの、これは主として漢籍を通して參つてゐる。大体右様位のものであります。

先づ漂流民について申すと、実は江戸時代は鎖國時代でありまして、日本人が海外の智識を持たないようにと幕府は努めていますので、漁撈中や廻漕中に太平洋に漂流して後南洋諸島に漂着し、それが幾年かの後に外国船によつて日本に送還せられる。処が國元に歸りまして、藩庁などが嚴重な監視を致してしまして、世間並の交際は出來な



い。所謂軟禁状態で一生を終らせるのでありますが、(福岡藩記録参照)幕末外国問題の起りまして以来は、漂流帰還者は時勢上必要な人物となつて、登庸せられるに至りました。その幸運な人は例をとつて見ますと、土佐幡多郡中ノ浜ノ漁夫漂流民中浜万次郎の如きがその一人であります。彼は天保十二年(一八四二)十五才の時、漁業に出て同船の人々と共に漂流し続けまして、米国の捕鯨船に救はれ、船長の好意によりまして、船長の郷里ヘヤ・ヘブンに参り、小学校程度の私塾に入り英、数、普通学を修めました。此処で一才注意すべきことは、教会の出入のことでありますが、同地のオーソドックス派の教会では入るのを許しませんでした。ユニテリアン教会は之を許可しました。これは後年米国基督教の日本布教上注意すべきことであります。そして万次郎は嘉永四年(一八五二)に琉球に帰つて参りました。その時鹿兒島の藩主は島津斉彬でありまして進歩的な人、海外の人文社会自然諸科学を、藩地に取入りたいと望んでいる時ですから、万次郎を招致致しました。万次郎は米国の政治状態と造船術を、この藩に伝へている。それから長崎に参り、奉行所の取調を受けましたが踏繪を行つて耶蘇教徒でないことを証しました。此の時万次郎の所持品を奉行所が取調べましたが、その内に次のような書籍があります。原文の儘申しますと、

デイクシヨネリー 但シ英吉利語一八四五年版

ヒストリ 但シ風土記一八四三年版

フアールムス、アルメニツク 但シ農家曆一八五〇年版

ゼ、ライフ、オブ、デヨルデ、ワシントン、但シアメリカ州共和政治開祖デヨルデ・ワシントン一代記

と記されています。形式的に入獄した後赦免せられ、本籍の土佐藩に引渡されまして、土佐藩の政治家吉田東洋に米国の事情を話しています。それから時勢が時勢でありますので、幕府に召し出され登庸せられた。外藩の陪臣、いや漁夫の身で以て、幕府直参に上つたのであります。恰もこの頃は米国のペリー提督が来航した時でありますので、心ある者は彼を登庸することの必要を説いています。大槻磐溪の上書に

土佐漂流民万次郎儀は頗る天才ニ有之者ニテ、米利幹国滞留中殊之外彼国之者ニ寵愛被致、学校ニ入天文測量、砲術等迄皆伝相受罷り歸り候由



それまではよいとして、次の文句に

殊ニ米利幹人ニハ十ヶ年モ相交リ候儀、定テ当節渡来ノ千余人中ニハ万次郎懇意之者モ可有之

とあります。米国の広さと人口とは、一寸見当が付かなかつたかと思うのであります。以来万次郎は徒士格に迄登用せられ、外国掛として重要な地位に上つたのであります。(中浜東一郎著中浜万次郎伝、長崎奉行所記録等参照)

中浜万次郎の外に、ヨセフ・ヒコがあります。嘉永三年(一八五〇)江戸より兵庫に向う栄力丸で遭難して漂流生活に入り、米國に参り皿洗いを致したり、税関長の秘書となつたりしています。ペリーが日本に参りました時には、十七才で米國紐育辺を歩いている。領事館員となつたり、横浜に商館を開いたり致し、長崎でも商売を致しました。慶応三年(一八六七)六月に長州藩の木戸孝允が長崎でヒコを訪いました條を、ヒコの自敘記に次のように記している。

外国事情ヲ余ニ問イ、殊ニ英・米ノ歴史・制度・政治ヲ質問セシ故、余ハ余ノ能フ限り、其ノ問ニ答ヘタルニ、木戸氏ハ合衆國ノ憲法極メテ珍貴ナリトシ、斯ル制度夢ニモ見タル事ナシト言ヘリ

とあります。(高市慶雄訳ヨセフ彦蔵自敘伝参照)

三、政治思想の影響　日本の維新政治の組立の上に西洋政治思想が如何に影響したかと云うことについては、此れは大問題でありまして、五分や十分で話の出来る訳ではないのであります。例へばアーネスト・サトウを通じて土佐の後藤象二郎や藩州の西郷隆盛に伝わつた英國の政治思想。(維新史料編纂会訳維新外交秘録)ミルの自由論、これは明治初年に中村敏宇先生によつて訳出せられた「自由之理」でありまして、仏國の政治思想と關聯があり、板垣退助の自由黨の指導原理の一ツをなしている。(板垣退助編自由黨史)独逸填太利の政治思想、これはスタインやグナイストを通して伊藤博文等に伝わつて来ている。(須多因氏講義、伊藤博文伝)その外に日本の維新政治を近代國家式に組み建てるに至らしめた米國の影響を看過してはならないのであります。何と申しまして、日本を開國致したのが米國でありますから、近代日本人には米國と言うものについての関心が非常に濃い。ペリー来航前後に於いて米國事情の日本への紹介書が頗る多いのであります。尤もその紹介と申しまして、中國板の漢藉から重訳抄訳接受したる智識を纏めたのであります。書名等を挙げますと。



嘉永六年 潮戸昌邦 北亜墨利堅全図

同 豊田亮 靖海全書

同 七年 中山士美 彌利堅新図

同 広瀬達 亜米利加総記

同 同 統亜米利加総記

同 正木篤 美理可国総記和解

同 同 墨利加沿革総記和解

同 中山 依左衛門 海国図誌亜米利加洲部

安政二年 小関高彦 合衆国小誌

同 鶴峯戊申 米利幹新誌

尙後の話に關聯のありますから、一冊追加しますと

元治元年 裨治文原著 箕作阮甫訳 聯邦志略

亜米利加紹介と申すことは、一面共和政治の紹介であります。(鮎沢信太郎等著鎖国時代日本人の海外知識参照)  
 一体當時の政治思想を見ると、(一)旧幕時代そのままの幕府政治是認。(二)王朝時代に憧を持つ所の王政復古の思想。(三)  
 西洋伝来の議會政治の思想等があります。尤もこの議會政治は文政十年(一八一七)に青地林宗の訳述した輿地誌略の  
 中に英国のパーラメントとかコンモンズなどについて述べてあります。兎に角米国が日本と通商條約を初めて結んだ  
 ということは、大きな影響を文化交渉上にも及ぼしているのです。

明治元年(一八六八)の閏四月に「政体」が発表になります。これは司法・行政・立法の三權分立の上に樹てられた  
 明治維新の政体でありますが、その起案者は土佐出身の福岡孝弟でありまして、其の種本が、聯邦志略であります。  
 (国家学会編明治憲政財政史論参照)これによつても知られる如く、維新当初の政治思想の根本の一ツに米国の政治思想  
 のあつたことは争はれない。後の話になりますが、明治六・七年頃から民権論が盛んとなつて、政府が米国政治、と



云うよりは共和政治を警戒して参りました。明治十一年に、後の元老院樞大書記官、司法・農商務大臣、延いて樞密顧問官となられた金子堅太郎伯がハーヴァート大学の政治学科を卒業して帰国されましたが、当時は藩閥全盛の時に、閣外の者は仲々任官が出来ない、尤も伯は藩閥外の福岡藩出身ですからでもあります。この時、政府は米國帰りを指して、共和政治国の本場で修業して来た者を政府の役人に採用するなどは、以の外と云う訳で、金子伯もあの時は困つたと述懐されていました。(金子堅太郎伯の談話)

四、留学生 徳川時代の末になりますと文化交渉は、和蘭より英國・米國と移り行きますにつれて、米國留学といふことが、維新直前よりして行われ初めました。これには脱藩然として渡航する私的留学もありますし、又藩庁の命を以て留学する者もあります。例へば安中藩の出身である新島襄先生が函館から脱出せられたのが元治元年(一八六四)であります。後の京都同志社の創立者で余りにも有名であります。(デビス著新島襄先生参照) 後の総理大臣高橋是清が横浜から米國に渡航せられたのが慶応三年(一八六七)で米國で奴隸に売られた話がありますが(高橋是清自敘伝)此の高橋翁と同船して渡米した者に、福岡藩の留学生平賀義質、(磯三郎)此れは後に司法省の中判事で日本陪審法の最初の主張者。本間英一郎、これは碓氷峠アプト式の創設者、井上良一、これは日本人最初の大学教授。この人達が未だ東も西も判らないで留学の途についている。(金子堅太郎著英文井上良一伝。筑紫史談大熊浅次郎論文参照) 高橋翁の記述に従いますと、上等の日本人客には筑前藩の書生が五六人いた。これを引卒して行つたのが平賀磯三郎、そして下等船客は伊東四郎即ち後の軍令部長伊東祐亨大將等がいたとあります、其他勝小鹿、富田鉄之助、高木三郎などが同船している。大体維新前に於きましては西洋の新智識を得んとするには、長崎が唯一の留学地であつて、九州諸藩を初めとして江戸・京坂人其他地方の西洋学に志します者が皆長崎に集まつている。福沢諭吉先生の自敘伝などを読まれますと長崎内地留学の事などは、よく判るのであります。(福沢諭吉自敘伝又幕府の海軍操練所が此処にある。ここで新智識を受け入れたのであります。が、(勝海舟編海軍歴史参照)段々時勢が移り行くと長崎では物足らなくなつて、直接各國に留学するようになつた。そこで前に述べたような次第となつた。長崎に来て見ますと外國に行きたくなると見えて、岡山藩の花房虎太郎(子爵花房義質)が長崎から突嗟世界一周の途についたのが、矢張り慶応三年(一八



六七)であります。(子爵花房義質伝、震卿外遊記参照)

殊に明治四年歳押し詰つて、岩倉大使木戸・大久保・伊藤・山口の四副使一行が條約改正の内意を含み、兎に角米欧回覧の途にきました時には、公卿・大名の子弟の人々が多く留学の途にいたのであります。此の時留学者は二種類あります。一つは当時の言葉で申すと、華族は皇室の藩屏として国に尽さねばならぬからと云うので、外国事情を見聞して参るだけを目的としている者、他は學問を深く研究して来ると云うのであります、併し大体武士階級でありますので、政治・経済の方に志望が向つてゐる。私との關係筋を申しますと、福岡藩の留學生金子堅太郎氏はハーヴァート大学で政治學、同藩留學生團琢磨氏はボストン・テクツで鉱山學を勉強されたのであります。此人達は福岡藩第二回の留學生。尤も今日とは丸反対でありまして、日本の一両が墨銀二弗に換算されていた。これは一八七一年頃のことであります。この金子、團両氏を福岡前藩主黒田長溥公が留學せしめられる時、一技一能に達する迄何ヶ年留學しても宜敷い、學資は出す。併し必ず一技一能に達して参れと沙汰していられます。この兩人はボストンのライス・グランマー・スクールから修業した。何れも十余才の人達、岩国の吉川重吉男が一番若い幼年者でありました。

(英文吉川重吉男自敘伝、金子堅太郎伯談話、男爵團琢磨伝参照)

この岩倉大使一行の船には、使節隨員の外に五六十名の留學生が乗つてゐます。特筆すべきことは、北海道開拓使から五人の女學生が留學してゐる。北海道文化と米國文化との關係については、後に申しますが、この女性津田梅子、後の津田英學塾の創設者、外に永井しげ子、山川捨松、上田悌子、吉益りよ子、この五人であります。(吉川利吉著津田梅子参照)

當時米國にでも留學する人で、自然科学に志すというのは、余程の人であつて、そこに何か動機があつたのであります。と申すのは前にも申した通り、多くは侍の子弟でありまして、自然科学を職人の學問位に考へてゐる。建築學は大工の學問、土木工業は土方の學問、鉱山學校は穴掘りの學問、そんなことに學校は不必要位に考へてゐる。第一學問として認識してゐない。團さんの話ですが、初めて汽車に乗つた。ゴーと云つて、韋駄天に車が走る。「へー妙な事だ」と考へた位、それ以上何故などと考へる頭の余裕はなかつたと申されてゐますが、マア左様であつたと思ひ



ます。米国の小学校に入つて、理屈が少し判つて来る、又見るもの聞くものが器械づくめ、頭が科学的になつて来て、科学に志すという次第と思います。

併し留学すると、一生懸命に勉強しました。井上良一氏が当時書いた英文の論文の六七篇ありますが、(英文米国に於ける日本人参照)英文学者に聞くと、仲々達者な英文であると評していられます。余談ですが、今の東京大学を設けられる時に、千葉县市川の国府台にと云う論があつた時、井上氏が本郷彌生岡を主張した。(村田峰次郎翁談話)何でもないようではありますが、学問と実社会を連結しなければならぬと云う井上氏の主張とされます。コロンビヤ大学や、ハーヴァートが市中にあり、米国の哲学などが斯様な環境から出て来ると思います。

何と申しまして日本の生活と米国の生活様式と違ふのであります。団さんの船中の話ですが、パンを見るとカステイラよりは少し淡泊だ、これはお茶菓子だといふ。珈琲は汗粉かと思ひ。ライスカレーはこれは日本食だと申してゐる。(団琢磨男談話)この大使一行が渡米した頃、即ち一八七二・三年の頃米国に留学してゐる者が二百人位あつたと申されてゐます。日本の留學生は勉強するといつて米国でも評判は仲々宜しいのであります。イリノイ州のバトルといふ牧師が、日本學生二十九名を引率して、研究旅行に出た。そのことを記述しまして、

コノ旅行ノ折ニモ書籍ヲ携ヘタリ、書籍トイフモ道中記・旅行案内等ノ類ノミニアラズ、文典ヲ携フルモアリ、数学書ヲ手ニセルアリ。長途鐵路ノ旅行ニ至リテハ一ノ飲料モ、一ツノカードモ、一ツノゲームモアルナク、読書ノ疲レヲ僅カニ日本流ノ喫煙ニ慰メテ、彼等ハ最モ愉快ニ旅行ヲ続ケタリ

とある由であります。又宴会などに招待されましたも、「予ハ尙少年ナリ、思フニ宴会ニ臨ンデ飲酒・喫煙・舞踏ノ技ヲ學ブ如キハ、我が日本政府ノ予ヲ此ノ米國ニ留学セシメタル本旨ニ非ルベシ」とて、断状を出してゐます。一面には非常に勉強する學生もありますが、他面情けてゐる者もありまして、明治七年に政府は九鬼隆一を派遣して勤怠をば取調べさせまして、多くの學生に帰國命令を出してゐます。これは日本政府の財政が余程苦しくなつたからでもあります。山川健次郎先生の如きは当時ユール大学で非常に勉強されてゐますが、歸國の命に接し、学問中途でありましたので歸られませぬでした。この辺のことは山川先生の伝記に詳しく記してあります。(男爵山川健二郎先生伝)



当時此等の留學生の一番困りましたのは何と申しても語學であります。山川先生の如きは當時、語學上達の方法として日本人のゐない片田舎で勉強してゐられます。福沢諭吉先生は長崎以来英語を学ばれましたし、旧幕時代遣外使節隨員として、外国にも兩度お出になつてゐましたけれども、それでも先生の英語演説は、外国人からみますると、英語といふ思はなかつたといふ話であります。岩倉大使一行中の安場保和が華盛頓から俄かに帰国の途に就きますが、これもその理由は、一行中に英語が判らないで、食堂で何度ボーイに註文しても、アイスクリーム計り持つて来る、それ等を安場が傍観して憤慨し、歐洲をこの調子で廻るとすると思ひやられる、無駄な國費の消費だと憤慨して、帰國するのであります。(安場咬菜父母の想い出)

**五、岩倉大使一行の渡米** この岩倉大使一行の欧米事情調査は余程徹底してゐまして、その努力の跡は高く評價さるべきであります。それは「岩倉特命全權大使米歐回覽実記」を御覧になりますと、感心させられます。政治・經濟・商業・教育・工場百般に亘りまして、細に入り微を穿ち調査し、批判を加えてゐまして、識見なども、余程偉く高いものがあります。觀察の徹底実に敬服に値するのであります。流石に若い理事官連中偉い調査をいたしたと思つてゐます。(岩倉特命全權大使米歐回覽実記)教育方面に於きましては田中不二麿の「理事行程」に詳述してありますが、この調査が明治初期の文化を進むるに与つて力ありましたことと肯かれるのであります。

**六、森有禮** 茲に注意すべきことは森金之丞即森有礼の存在であります。彼れは十九才の時慶応元年薩州藩留學生として英國に留學してゐまして四年間彼地に在留、明治元年七月徴士外國官權判事と爲り、明治二年には制度寮撰修を勤めました。日本最初の国会であります同年(一八六九)の公議所に於いて廢刀の建議を致し、全議員即全公議人の總反對を受け滿場一致で否決せられたのであります。今日申すとキザナ奴と人々から思はれと思ひます。木戸孝允日記を見ますと、森は有礼でなくして彼れは無礼であると評してゐます。後明治二十二年二月に文相でありましたが、西野文太郎に暗殺せられたのであります。此の人が明治三年十二月から六年七月まで米國に少弁務使、後陞して中弁務使として、駐在してゐまして、米國の教育其他を研究し、これを日本教育界に參考にしたいと考へたのであります。明治十年前後からして森の考へは日本文教政策の上に大きな影響を与へてゐるのであります。彼の米國仕込



の意見中には羅馬字採用、英語を國語とすること。信教は自由でなくてはならない。女子教育は必要で急務であること等を主張いたしました。帰朝後は当時の最高知識者を以て組織してゐる一団体即明六社の同人として明六雜誌に種々意見を述べてゐるのであります。民撰議院設立建白書の評、独立國權議、妻妾論などがありますが、明治八年(一八七五)二月に東京府知事大久保一翁立会、福沢諭吉先生を証人と致しまして、広瀬阿常と申す婦人と結婚致し、証書を読み上げた。その第一條には「為約ノ雙方存命ニシテ此ノ約條ヲ廢棄セザル間ハ共ニ余念ナク相敬シ夫婦ノ道ヲ守ルコト」第三條に「有礼阿常夫妻ノ共有シ又共有スベキ品ニ就テハ、雙方同意ノ上ニ非サレバ他人ト貸借或ハ売買ノ約ヲ為サザル事」とあります。世間聞いて啞然たるものがあつたのであります。日常生活に於いても書生等と共に同一の食事を致しました。その書生の一人に高橋是清氏があつたのであります。有礼は米國駐在中に、エール大学前総長、ハーヴァート大学総長等十二名の米國有名な教育者に、即ち前エール大学総長デー・デー・ウールセイ (T. D. Woolsey) アムハースト大学総長ダブリュー・ヒー・スターンス (W. A. Stearns) ヨー・クーパー (P. Cooper) オー・ペリンチーフ (O. Perinchief) ホム・ホプキンス (M. Hopkins) シー・ヘチ・セーリー (G. H. Seelye) ユー・ジャシーシー大学総長シー・マクコック (G. MacCoch) シー・ヘンリー (J. Henry) ラトガース大学教授デー・モルレー (D. Murray) コンネクチカット教育局ジョー・ジョー・ノースロップ (B. G. Northrop) ハーヴァート大学総長シー・ダブリュー・ヘリオット (C. W. Eliot) シー・エス・ブートウエル (G. S. Boutwell) ジー・ヒー・ガルフィールド (J. A. Garfield) の諸氏に対して、教育は次の諸点に就いて如何に影響するかの質問書を發して、答を求めてゐます。(一) 一國の物質的繁榮に対して。(二) 商業に対して。(三) 農業工業上の利益について。(四) 國民の社会的・道德的・身体的状態に就いて。(五) 法律統治上に於ける効果。以上五ヶ條を質してゐる。此れに対する返書を纏めまして、英文で日本教育策を書いたが、未成稿本で一部分英文で今残つてゐることでありまして、(1) ハーヴァート大学のジョン・イー・ガルフィールド氏の書翰、(2) 英語を日本に通用せしむるの論、(3) 合衆國教育概略の三篇丈が纏められた丈のこととあります。尤この答申者の内にラトガー大学教育のダビット・モルレー (David Murray) のあることは注意し置かねばならないのであります。(明治文化全集教育篇、高橋是清翁自伝、森先



## 生伝参照

七、教育制度上に及ぼせる影響 明治維新直後に於いて米國文化の日本教育制度に及ぼした影響は最も大なるものがあつたのであります。従つて米國人の我國教育界に貢献したことも頗る多いのであります。特に学校教育の本源をなす処の師範教育には多分の關聯を持つてゐるのであります。

一体明治初年社会の趨勢は、四民平等教育機会均等であります。越前藩の達などには四民混淆の御時節と申してゐますが、これには米國の教育が一番よい手本であつたと存じます。明治初年教育行政及び教育学の参考になるとして、文部省等から出版されてゐますのは、米國人キツケルシヤム原著「学校通論」（明治七年刊）、米人ハート原著「学室要論」（明治八年刊）。米人ページ原著「波日氏教授論」（明治九年刊）。米人ノルセント原著「那然氏小学教育論」（明治十一年刊）。同氏原著「教師必読」（明治十一年刊）等であります。直接日本教育界に貢献した人の第一に擧げられるは米人スコット (M. M. Scott) であります。明治四年大学南校英語及び普通学教師として聘せられ、明治五年東京師範学校の創設せられます時転傭せられて教育指導の任に當つた。我國師範教育の基礎を据へた人と申して宜しい、在邦十二年の久しきに亘つてゐます。当時日本の学生は殆ど皆漢学仕込であります。近代教育に關する素養と理解とがなかつたのである。一例を申すと、漢詩の場合に平仄は判るが、独乙語学に男・女・中性のあつてゐることはどうしても理解出来なかつた方々である。御承知の通りに明治五年には教育史上劃期的とも申すべき学制頒布がありまして、八大学区制が發布せられました。これは中央集権確立、封建思想打破上必要でありました。併し其後も絶へず改変が行はれてゐます。明治十二年に教育令が發布せられます。その間の日本人で指導に當つたのが曩に米國教育の調査に従事してゐました田中不二麿でありまして、其の相談役が学監と云ふ肩書を持つてゐますダウツイト・モルレー (David Murray) でありまして、彼れは明治六年より十一年まで五ヶ年間日本にゐた。そして彼れの日本教育に關する意見は、「学監考案日本教育法」と、その説明書に詳らかであります。一体前の学制はその條文の示す如くに劃一主義でありますが、明治六七年頃から盛となりました自由民権思想の勃興時代になりますと、この劃一主義は、自由を阻害するものとして、明治十二年の教育令が發布せられ、茲に米國教育界と密接の關係が生じて來



たのであります。勿論これは国民が米国一辺倒に傾いたからではなく、先きに福沢諭吉先生の「学問のすゝめ」などにも教育の自由が説かれたものであつた。そして明治七年八月に小学読本が文部省から刊行せられたが、此れがウィルソンのリーダーの翻譯でありました。そこで下級の学校で読んだ日本語の読本が、上級で英語を学ぶ時になると、先年読んだものと同じ文句の英文であつたと云う有様になつたのであります。此の大勢の推移は、終戦後の学制改革と比較すると誠に面白いことであります。又明治九年（一八七六）に米国費府で万国博覧会が開かれた時に、文部省で英文日本教育史が編纂せられていますが、これもモルレーの立案であつたのであります。尙教育事業に米国人の貢献は非常に多い。例へばイング(John Ing)、これは明治初年弘前に参り東奥義塾の英語教師で、佐藤愛麿、珍田捨身、本多庸一諸先生の先生であります。タルコット女史(Elija Talcott)、ダットレー女史(J. E. Dudley)、これは明治六年来朝して、明治八年神戸英和女学校の創立者、此校神戸女学院大学の前身であります。イートン(Eaton)、ペニー(George Penny) 明治六年来朝大阪英語学校教師。ボードウイン(Charles Baldwin)、明治四年来朝、京都英語学校の教師。フライン女史(Mary Prun)、ヤンン女史(L. H. Pierson)、グロズビー女史(J. N. Grosby)、明治四年来朝、横浜共立女学校の建設者。未だあります。斯くの如く各方面に亘つて、米人教育家の活動を見たのであります。(日本文明協会編明治文化発祥誌、明治文化論文集時野谷氏論文等参照)

八、基督教傳道と社會事業 教育と密接な關係を有するものに宗教方面があります。勿論基督教の伝道であります。延いて社會事業の發達に、非常な貢獻を齎したのであります。昔天文十八年（一五四九）にフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸いたして布教に従事いたしますが、その後非常な勢で我国中世に發展致します。その理由としては宣教師の人格の高かつたこと、医術に堪能であつたこと、科学的智識を有していたために信徒には奇蹟と見えたこと等が挙げ得られるのでありますが、明治初年の布教に於いても何同様な觀察が行われるのであります。日本と最初に結ばれた外国條約が米国でありました關係上、米国の教師が最初に日本布教に従事致したのであります。開港條約の結ばれた安政五年の翌年四月（一八五九）にはエビスコパール教会のジョン・リッギンス(J. Liggins)それからプレスビテリアン教会のゼー・シー・ヘボン(J. C. Hepburn)夫妻。このヘボンさんは非常に有名な方で、当時



の日本人より非常な尊敬を受けました。来朝は安政六年十月神奈川に参り、文久二年（一八六二）に横浜に移ります。そして聖書の翻譯もありますし、有名なヘボン辞書即ち和英英和辞典もある。此れは英学者にとつては至宝の書籍でありました。又牛乳搾取業とか製氷事業とか種々な事業に助言を与えまして、それから有名な眼薬、岸田の精綺水はヘボンさんの処方であると云うことです。施療もいたしまして横浜山下町に医院を建てて主として庶民に施療をいたしています。ウキリヤムス (C. M. Williams)、この人は先きに述べたリツギンスと共に日本来朝最初の宣教師でありまして、安政六年に参っています。監督に任ぜられた人でもあります。シモンズ (Duane B. Simmons) 例の蟲下しセメンエンの製調剤者で、横浜に病院を作つた。後の横浜十全病院であります。これも安政六年十月来朝者であります。それからバラ (J. H. Ballagh) 夫妻、これは文久元年（一八六一）に神奈川に來朝、後横浜に移りました。この人について明治元年（一八六八）に洗礼を受けた日本人もあります。

昔は長崎が西洋文化の淵藪でありましたが、明治元年前後になりますと横浜神奈川がその淵藪となりました。但し各地方に於いても西洋文化は接受されたのであります。例へば熊本にはジェーンズ (J. I. Jones) がいます。この人は明治四年（一八七一）に熊本学校に聘せられた人ですが、海老名弾正、浮田和氏、徳富蘇峰、金森通倫諸先生の先生で非常に感化を及ぼした人。それからデフォレスト (J. H. DeForest)、此れは明治七年に來朝して後仙台地方特に東華学校を中心として布教している。申し後れましたが更に学校教師方面を見ると、それは又偉大なるものである。文部本省を初めとして、大学南校、神戸英和女学校、大阪英語学校、京都英語学校、更に北海道札幌農学校を中心として、多くの優秀なる米國教師が諸学科に亘り其職を奉ぜられたのであります。中には婦人教育家もあるのであります。科学方面に於いてもグリーフィス (William Eliot Griffiths)、此れは「皇國」の著者、明治三年に來朝され越前藩に招聘された。もと化学者であります。昭和七八年頃でしたか來朝された時は、私面会いたしました。メンデンホール (T. C. Mendenhall) これは地球物理学者。大森貝塚発掘で有名な動物学者モールズ (E. S. Morse)。日本鉱山界石油業界に偉勳を樹てましたライマン (E. S. Lyman) 此れは地質学者で北海道の開拓に至勳あり、且日本の諸鉱山の開鑿に力を尽して呉れました。仲々功績は大であります。（工部省沿革志、明治文化発祥誌、ジーシーハ



ボン伝等参照。)

要するに、明治維新直後の日本の組直しには、その文化的方面に於いて米国文化の影響を受けている処が非常に大なるものがあつたと申して宜しい。尙前に挙げました米人の外にも多くの米人が文化に貢献せられた。挙げ洩した人々、又は擧げて軽重を失している人も沢山あると存じます。

**九、北海道文化と米文化** 米国文化は斯くの如く各方面に接受されたのでありますが、これを地理的に見ますと特に北海道が浮び上つて来るのであります。何分にも当時に於いて内地の方は旧藩の勢力がありますので、明治政府と雖浮と地上に手が付けられない。そこで何等旧勢力の存しない旧蝦夷地即ち北海道を中心に、明治政府は施設を致しました。これには後に屯田兵の制度が出来ましたように北地警備の意味も寓されてゐると思ふのであります。今の札幌市の街区が余程大規模に出来てゐるのも、この氣運の現れと思ふのであります。そしてその指導に当りましたのは米人クラーク (William S. Clarke) ライトン (Benjamin Swith Lyman) ケントロン (Gen. Horace Capron) 等がゐます。その文化の象徴は札幌農学校でありました。北海道開拓使が女子留学生五名を明治四年末に米国に送つたなどは、その盛んな意氣が察せられるのであります。かつて実業家の会合で聞いた話ですが、北海道で或る事業を創めようとする、そこから水銀が出る、此処に水銀があるのかと不思議に思つてゐると、それは明治初年に試験調査用に、そこに投入した水銀であつた、随分多量使用したものだと思つた話でした。三井の団琢磨さんなども、北海道に行くと、かつてボストン・テックに学んだ時のことが甦つて、亜米利加に帰つたような氣持になると申されてゐたのであります。(北海道大学五十年史、北海道志、北海道史参照)

**一〇、美術界に就いて** 日本美術と米国文化との關係に就きましては、後刻に隈元謙次郎先生が御講演下さいと存じますので御聞をお願いしますが、私が金子伯より承りました処を、一言申して置きます。丁度明治十一年(一八七八)に金子さんと団さんがボストンの学業を終つて日本に帰られます時に、市俄古辺の一駅で、偶然一米人に会われた。スルトその米人が、君達は日本人が、自分も近々日本に行くと云つて話した。それがフェノロサ (Ernest F. Fenoiosa) であつたと、話されました。伯も後年日本美術協会長となられました。何かの因縁と存じます。予定の時間も



参りましたので、止めますが、実は万延元年（一八六〇）に村垣淡路守範正、新見豊前守正路、の一行が米国に参り、随員として殆んど日本各地方の人が身分を秘して参りまして、米国文化を接受したとか、遡つては天保八年（一八三七）六月モリソン号が浦賀に参りまして、殊に注意深くも聖書は一冊も持つて参らなかつという事などについて、申し述べたいのでありますが、それは略しました。

〔附記〕講演筆記修正に当つて、主なる参考書を、文中に附記して置きました。学徒の研究に資せんが為めであります。